

〔研究ノート〕

なぜ学生は就学意欲を失うのか —就学意欲における構造的問題とその本質について—

枡 岡 大 輔

はじめに

近年、大学の教育及び経営改革のカギを握る課題のひとつとして、大学中退者・離籍者を減らし、学生自らの主体的な学びを促進することが挙げられている。この課題は特に中・小規模の大学において喫緊の課題である。だが、その解決策はいまだ明瞭となっているとは言いきれない。

本準備的研究においては、この課題に横たわっている論理的構造を考察し、一般状況やその対策例に触れつつ、課題解決のために必要とされる本質的視点を追究してゆく。

1. 就学意欲の問いの前に横たわる欲望と関心の相関構造

少子高齢化を受け、大学は「全入時代」と呼ばれる時代に突入した。このことが意味する危機とその影響については周知のごとくである。

大学進学者数の分母がそもそも減少しているのだから、いかににより多くの進学者を獲得するかが大学存続の要となることは間違いない。だが、それだけで大学存続の要件が満たされるとは決して言えない事態となった。すなわち、学生流出の問題である。

大学の存続をかけ、大学間の生存競争は厳しさを増している。一部のブランド大学でさえその実力と真価が問われる時代となった。中小規模の大学にとってはまさしく後がない。どれほど他大学とは異なった独自の教育的価値を社会に示し、大学のアイデンティティを確立できるかが、勝負の分かれ目である。

この緊迫した状況において、「就学意欲」の低下に紐づく離籍の問題がさらなる追い打ちをかけている。

様々な理由で学生は大学を辞めてゆく。その根本には、「就学意欲の低下」問題がある。学生が大学を中退する原因や要因、あるいは、なぜ就学意欲が低下するかについては、様々な研究がある。しかし、決定打はいまだ見出されていないのが現状である。

実際には、決定打となる方法論は、大学の存在価値の本質を問い直し見据えた上にこそ求められなくてはならない。なぜなら、大学を取り巻く時代状況やその成立を支える構造なしに、学ぶ意欲だけが独り歩きして発展することはあり得ないからである。

学生の学ぶ意欲が生き生きと羽ばたく、その源泉には、人間の生そのものへの生きる意欲、生の欲望とその展開可能性が脈を打ち、生きているのでなくてはならないのである。

就学意欲というものは、当然、その前提として問われるべき学生自身の生きたい気持ち、

すなわち生の欲望をその源泉にしている。生きたい、より良く生きたい、という欲望そのものが減退している限りは、必然的に、大学での学びもその本来の輝きを失うことになる。

例えば、精神的あるいは身体的な危機的状況や、大学生活以前の生活自体が不安定で、様々なトラブルを一人抱え込んでしまっているような場合、学生が通常の大学のカリキュラム通りの計画を進行させることに支障が生まれる恐れは当然出てくる。その支障が、もちろん、長期に渡ればわたるほど他の学生とのギャップ・認識格差が生じることは明白である。そして、これを端的に自分ひとりの力で取り返すことは決して容易なことではない。

生きることそのものの欲望が狭まり、一定程度、可能性そのものが閉ざされてしまうような条件下では、生きる希望さえ危ぶまれ、学ぶ意欲はそもそも活性化しようがない。

他方でまた、生きる欲望そのものは、社会を射程に入れて問われる部分が非常に大きい。というのも、社会とは人間の生存可能性の現場であると同時に人間が人間として生活をつくるうえでの関係そのものを意味するからである。

つまり、社会で仕事をして生活していく希望を持ちうるのであれば、そもそも社会に出るうえで役立つ学びや就職に強いといくら大学が謳ったところで、社会的関心を持たない学生にとっては何ら積極的意味を与えず、その心が脈打つこともないのである。

学生が現実的な社会を生きていくことに絶望している限りは、就学意欲はおろか、生きる理由や目的そのものさえ明確にできず、ひいては社会的自立を回避して、他者に対して自己を開くことを拒み、絶望に至りうることは、十分に考えられることである。そのような場合には、そうして絶望する自分自身に対してさらに絶望を深め、自己に対する自己自身の期待や信頼を失い、自分自身の存在価値に対する不安が強まることも往々にしてある。そうとなれば、ますます、その学生が大学で学ぶことそのものの喜びや意義を見出せなくなる可能性はより高まることになる。無価値な自分がいくら他者とかがかわったところで無価値な結果をしか生み出せない、といった自己否定の論理回廊に落ち込んでしまえば、そこで見聞きすることや自らが実行することも無意味化しかねないのである。

こうした学生の就学意欲の喪失ないし絶望は、現代のある種のニヒリズムと言えよう。

就学意欲の低減は生の欲望の低減に相関している。また、生の欲望の低減は、自己自身に対する自己ないし他者への失望度合に相関する。

就学意欲の問題には、このような生の欲望と社会との相関的構造が横たわっている。就学意欲の低減の行き着く果てには、大学に通う意味そのものの喪失があり、離籍判断が待っている。生及び就学の意欲低減の連鎖がこの構造の負の部分として現れるのである。

生きようとする欲望の水路は、自分自身を通じて、世界や社会を生きてゆく可能性に対する水脈を必要とする。だがその水脈の源泉に対して明瞭な自覚を持つことはまれである。

それゆえ、就学意欲の問題においては、学生自身の生に対する了解、自己の存在可能性に対する認識やその理想・希望に対して、心身の状態や社会構造が非常に密接にかかわっているということが、まず受け取られなくてはならない。

2. 課題の本質可能性

どの大学においても中退者・離籍者数の増減は重大な問題である。それは大学の存続を揺るがす決定的な問題だからである。

端的に言って、「学生が辞めてゆく大学」とは、それ自体、大学としての生命力を欠いていることを端的に示す。つまり、大学を維持させてゆく経営母体の体力が失われ、また、学生の心をワクワクさせる魅力的な教育を欠いている予感を人に与えることになる。離籍者が多ければ多いほど、大きな穴の開いた大学ということになる。そのままでは、熾烈な大学間の生存競争における存続は、当然危うくなることが火を見るより明らかである。

大学固有のアイデンティティを確立し、社会に存在意義を示し、個々の学生自身が実感として大学での学びに喜びを見出し、社会に必要とされる学生を輩出し、時代的な要求に臨機応変に適応できなければ、その大学が歩む道は後退の一步をたどるばかりとなる。

だが、本来この課題はただ大学存続のためにのみ問われるべき問題なのでは決してない。むしろ、この危機的状況は大学を構成するすべての人間にとって創造的チャンスである。なぜなら、危機に瀕してこそ、常識的判断を含めこれまでの考え方や在り方に疑問を付し、大学にとっての本質的使命と課題を直視し、質実を求める総合的視座をもつことがより可能だからだ。なぜなら、共通課題の意識共有が促進されるからである。それは大学自身のおおのの立場や存在の紐帯を強める可能性を持つ。

大学を創造的に再生する求心力はそのように危機において際立つ可能性がある。時代にとって、社会にとって、あるいはわれわれ自身にとって、大学という学びの場そのものの存在意義・存在価値の根本が、大学そのものの存在の本質が、問われなくてはならないからである。

大学生活を生活の支点とするすべての人が、意味ある大学生活とは何か、価値ある大学とは何か、生きるために本当に役立つ学びとは何かと考え直し、問い直し、提示し合い、新たな希望や可能性を一緒につくることが開かれてこそ、大学の新生は可能となるはずだ。

このことは単なるきれいごとには済ませることができない。なぜなら、大学の未来をつくるのは一部の単独者ではありえず、大学を構成するすべての主体、すなわち、学生、職員、教員の三者の有機かつ相補的な関係性においてこそ可能となるのだからである。

3. 大学を構成する主体の三位一体性

大学を構成する主体とはだれか。それは教育者だけでなく、また事務員だけでもなく、はたまた学生のみでもない。そのどれもが主体であり、また三者が一体となって初めて大学は固有の主体性を確立しうるのである。

三者の立場はそれぞれに全く異なっており、その役割と個々の目的もまた異なっている。それぞれが立場や目的を異にする、その中央にあるものが、三者がコミットする大学の存在意義、すなわち建学の精神及び教育理念にほかならない。

それぞれの役割と目的はこの大学の本質に照らしてこそ異なりうるものであり、それに基づいてこそ、相対かつ相互に補完し合い、本質的な有機的紐帯を結びうるのである。そうすることによってのみ、大学は己の本質を実現しうるものであり、大学固有の主体性とその学びの活性、そしてその実行と成果が、現実のものとなるといえるのである。

三者は実に、それぞれが、それぞれの他者を支えることによってのみ成立するような、三位一体の関係であることが肝要である。そのうちのいずれかが単独的に独立し、その立場ゆえに優遇されるべきであるということとはありえない。逆に、そのいずれかを欠いて成

しうる建学精神と教育理念の実現もまたありえないのである。

この三位一体の関係が、本質的には、それぞれ等しく不可欠の存在であるにもかかわらず、偏った力学や一辺倒の権力配分においてとらえられてしまうと、その本質的紐帯は解体してしまう。

隔たった関係性は不平と不満、疑心暗鬼を生む。一方が他方をうらやみ、あるいは、端的に無関心であるような固定観念や立場の固定化は、大学の生きた精神やいきいきとした教育学修の活動を生み出すものではありえない。

三者の有機的な紐帯がそこに生きるすべての主体の精神を活性し、生命を育むものであることが、改めて大学の主体性の必要条件であることが再認識されねばならない。

学生の中退や離籍に対応する人間は、おそらくは、そのような業務指令を受けた部署か、その部署に配属された人間である、と人はふつう考えるであろう。

それは間違いでは決してない。だが、同時にそれは間違いなのである。なぜならその時、その常識的な認識からは、大学の本質的主体性としての、各々の存在意義が見失われているからである。

大学を辞めていく学生は単に生きる意志や就学意欲のない学生であるのでは決してない。逆に、就学意欲と進学する意志があったからこそ、大学に来るに至っていたのであって、その逆では決してありえない。したがって、およそ離籍は、そうであったにもかかわらず、今や中退の決断に至った、ということであり、すなわち、大学はその学生に再生の可能性を提示できなかったということを端的に示すのである。

なるほど確かに、すべての学生の満足を満たすことは到底できないかもしれない。満足というものを基準に考えれば、一つの要素が人間の生のすべてを充足させることは到底できないことが推測さうれる。しかし、問題は学生が大学生活に満足するか否かではない。学生が学びの意義を実感できているか否かが就学意欲の現実を示す指標たりうるのである。

もし学生が、「この大学でなら自分の生の可能性を確かに掴み成長できる」という信を、大学に対して実感的に保持しているならば、わざわざ辞めたりなどしない。したがって、学生の信を失うということは、教員であれ、職員であれ、大学自体の信を失うということであり、その時には、学生が費用をかけて通学するに値しないという判断があるのである。

相互の愛なしに三位一体は成立しない。それは恋愛としての愛ではなく、智を愛し、相互の存在に対する尊重と慈愛において、互いを支える意味での愛である。

三位一体において初めて大学の主体性は確立する。われわれはそれゆえ、他者を失うことによって自らの存在意義をも見失うのであり、それぞれの立場というものは、大学の本質的理念を分有する一員たることによってのみ成り立つものにすぎないのである。

だからこそ、三者の紐帯を強める新たな関係性の在り方や、相互を活性する取組みを模索し、よりよい生の可能性を志向するあらゆる教育的チャレンジを持続的に促進することが必要不可欠である。その挑戦を止めた時、その本質的精神の活動もまた止まるのである。

中退や離籍の問題は、ただ単に学生が大学をやめることを阻止する、というものではありえない。阻止することが主要な眼目なのではない。それは根本的な解決を意味せず、結果としての留保にすぎないからだ。

重要なことは留保させることなく、就学可能性の促進と持続、その経過を支えることなのである。

大学という学びの場における日常的な経過において、大学を構成するすべての人間は互いに関わり合っている。良いことも、また悪いことも、経過の中で生じる。その経過のあいだに何の問題も生じないことが、学生にとって良いこと、なのではなく、いかにして大学を活性させるより創造的な知的体験を創り出すことができるかが問われなくてはならないのである。

4. 就学意欲創造のプロセス

中退や離籍に至る学生においては、肝心要の回復・修正のプロセスが抜け落ちていることがある。例えば、時には息を抜いて自分自身に向き合い、自分や他者のことを考え直す時間に貧窮している。あるいはまた、そういう時間を過ごすことのできる空間に困窮する。総じて、生きること、学ぶことに余裕がなく、それゆえ漠然とした不安や失意に落ち込んでしまい、結果として孤立無援の状態におのずから陥る可能性があるのである。

絶望している人間には、まばゆい世界の輝きはまぶしすぎる。見えるものが見えず、聞こえるべきことが聞こえないという自己閉鎖状態に陥ることは、実際、誰にでも起こりうることである。

だからこそ、絶望しかかっているものに届くアプローチがなければならないのである。それが決して容易に見つかるものではないのだ。絶望に至っている場合には、生活そのものを回復し、挑戦し、新しく生き直してゆこうとする生の欲望と可能性、生の選択肢が当人の心に対して閉ざされてしまうからである。

自己閉鎖状況を打開し、日常性ないし非日常性を経由して、当人の現実性を回復させる過程をつくるということは、単なる業務の範疇を超えて、教育の本質への回帰なしには不可能なことであるように思われる。すなわち、人間として、互いに向き合ってゆくことである。教育は、人間として向き合い、その中に生ずる問題に相互の力を合わせて取り組んでゆこうとする、生きることそのものを学ぼうとすることだからである。

就学意欲を回復するプロセスを生み出すためには、まず、大学の構成員である三者が三位一体において、大学の本質と相互の存在の本質を相互了解することなしには生まれえない。三位一体の紐帯なしに大学の未来を展望するということは、いわば、羅針盤なしに船を漕ぎ出そうとすることと同義の独断にすぎないのである。

5. 中退判断の是非とその対応

大学を中退する、という判断を学生がするには、相当な迷いと決断力がなくてはならないはずである。そして、中退の決断というものは、決めてしまってから後にそれを取りやめるということは基本的に考えにくいものである。

一人の人間が下した決断を覆す、ということは、容易なことではない。その人間はその人間の生きる目的に向かって生きている。だから、その人の生の目的に対して大学に通学することが、もはやなんら意味を与えない、と判断するからこそ、学生は中退を決断するのである。特にこのような場合には、学生の決断はまずそう簡単に揺るぎようがない。

まだ迷いがある、つまり、大学での再起を望んでいる節が少しでもなければ、中退判断

を止めることはほぼ不可能なのである。

だが、実際に、生の選択において何かを途中でやめることは、実は、いつ、どこ、誰においても、どのようなことについても自由である。中退の是非を問う前に、まずこのことは予めよく知られていなければならないことだと私は考える。

自分が生きている現実、様々な選択可能性のうちの、一つの判断に基づいている。それゆえ、今ある生き方だけがすべてであるとは決して言い切れないのである。

したがって、生存する現場の環境、その条件、その規定が、自分自身の生そのものをスポイルするのであれば、人はいつでもそれを棄却ないし修正できるのでなくてはならない。それをこそ、自由ないし自由意志と呼ぶのだから。

いまここではないどこかに向かおうとする意志の自由は、本質的に誰にも阻止できない。世界は確かにいまここにある、が同時に、いまここだけが世界のすべてではないのである。このことは、仮に今大学を辞めようかと悩んでいる学生に対しても、その学生自身の生の選択肢を考える上で一つの総合的視野としてはっきり明示されねばならないと私は考える。でなければ、大学側が提示するアドバイスというものは、どこまでも端的に一般常識的なものにとどまるか、あるいは、誰かあるいは何かの都合に基づいた、学生自身の生と主体性への配慮を欠いたものと墮す可能性があるからである。

就学困難や絶望にある人間に届く言葉とは、必ずしも常識的な見解のみで十全ではなく、より本質的な言葉が必要である。でなければ、当人の胸に決して届かないからである。そこで語られる言葉が、単に業務的なないし自己都合的なものであるならば、学生はそれを必ず見抜くだろう。そうであるならばこそ、信を失うのだ。

人間を見ずして人間を見ろ、という人間から、いったい人間の何を学ぶべきであるだろうか。あるいは、教育において人間の本質が積極的に語られないとするならば、いったい人はそこで何を学ぶうるといえるだろうか。そのような場合、そもそも、いったい何のための学でありうるといえようか。

大学は、少なくともその大学に通うすべての学生の生を積極的に応援する立場にあるのでなくてはならないと考える。それが究極的には学生自身の判断によって、たとえ大学を辞めるという選択に至るのだとしても、それがその学生にとって最善の選択であり、その学生自身の生を支え、生きる意欲を勇気づけ、元気を回復し、新たな世界へと羽ばたいてゆく追い風となるならば、その学生の自由意志を認めて応援できるのでなければ、いったい大学とは何のための、誰のための存在でありうるだろう。

大学は、人としての学生の生を、どのような意味においても積極的、かつ、適切にアドバイスを提示することで、その生きる意欲を支えるものでなければならないはずである。

一方で、大学を辞めることが、ただやけになって、自分をあきらめて、努力を放棄して、等ということであるならば、為されるべきアドバイスは、全く逆のベクトルを向くのでなければならない。なぜなら、その場合には、自分から自分自身を成長させる貴重なチャンスをただ放棄することを意味するからである。大学での学びは、そのように単に投げ捨てられてよいものでは、決してない。

大学で学ぶということは、新たな世界を知り、その可能性と絶望を多角的に学び、そこに新たな希望を生み出す方法を探究し、発見し、改善を実現する喜びに触れることだ。

その可能性が、大学という学びの場には、時間的、空間的、人的、情動的に、限りなく秘

められている。このことをわれわれは学生にしっかりと説得的に伝えられねばならない。

学生自身の生の可能性、つまり、新たな世界を切り拓くチャンスが、まさしく大学にあるということを、大学は学生に対し明示しなければならない。そして、そのチャンスを確かに手にできるために、「その人ができること」を探せるプロセスが必要なのである。

6. 再生のプロセスとしての思考

就学ないし生の欲望の再生プロセスを探すうえで重要なことは、ただ何のために大学に来るのかを問うということだけではなく、目的以前に、まず何をもって自分が生きていることを喜び、自分自身が輝けるかを、学生本人が自ら知らねばならないということである。

目的とは、生の多様で無限な輝きの中から、その人間の心つまり関心にしたがって、意識的に位置付けられる生の価値規定を意味する。それはいわば、自分自身の無限の精神の海にダイブして、そこから自分にとっての素晴らしい悦び、幸福、光を見つけ出してくるようなプロセスである。このダイビングは別名を思考と呼ぶことができるだろう。それには相応の時間を要する。というのも、「生きる目的」や「学ぶ目的」といった大きな枠組みをいきなり考えようとしても、困惑するのが常であるからだ。そしてそれは、他者によっては決定されえぬ事柄にほかならないのである。

自分が何を経験し、その中で何が心を豊かにし、自分の生を支えているのかを、自分のペースで、自分なりの言葉の通路を経て知るのでなければ、物事は自分自身の事柄として立ち現れてこない。その場合には、世界のすべては自分から遠く離れた疎遠な他者としての表情を見せるのであり、そのままでは、自分の未来を見据えた、生きた目的ないし実現する意義のある目標設定は、決してできないのである。この意味で学生自身が自らに問い、自らをもって思考することが、極めて肝心なのである。

何が好きで、どんなことに幸せを感じることができるのか。逆に、何に疑問を感じていて、何に苦しみ、どのような障壁を見据えているか。そのようにして、思考の過程を経ることで、自身の内的本質を自覚することが重要なのである。なぜなら、そこにおいてこそ、学生自身の固有の生の動機や価値の源泉が認識されうるからである。

思考のプロセスにおいて自身の生と学びの内的根拠を自明化する過程を経てこそ、自己が生きる上で、生の現場としての社会や、環境や、場所、そこでの目的や目標もまた、具体化されうる道筋を得ることができるのである。

大学における就学意欲を生み出す過程とは、学生自身の中に生まれる生きる意欲を問い直し、再発見する思考の過程なしには、生じえないのではなかろうか。それこそが学生の主体性の自覚を促すからである。思考において、学生自身が、自分と大学と社会（自然）との紐帯を見出すからこそ、学生の固有の関心が芽生え、再確認され、大学での学びにおける目的や将来の目標が明確にされうるのである。

自身の生の動機と学びの動機がしっかりと結びついていなければ、大学での学びは不毛で退屈でしかないものと享受される「就学意欲の低下」現象が生じる。

面白い授業というものもただ消費的に面白いだけであれば、いつかは飽きがかかるだろう。現代のように洗練された表現媒体（文化表象群）の消費生活を誰もが手軽に入手できる時代においては、大学の授業が単に消費的類比において比べられるなら、若者の眼に退

屈で、面白くない、無駄なものと思なされる可能性は避けえない。

大学教育は、単に就職のためでも、単に個人的な興味の延長のためにあるのではない。それらはより洗練された問いと探究の結果として生み出される上位関心にすぎない。単なる消費欲望から、固有の生の活性とその連続性を志向する創造的欲望へと、生と学びの欲望の志向性は転換されうるものでなければならないのである。でなければ、その生と学びは、どこまでも消費欲望の論理の中に埋没し吸収されてゆくことになる。そこでは自分自身の存在さえ、どこまでも摩耗することになりうるのである。だから、生の欲望や就学意欲は、失望にも似た絶望において、失われるのである。

自分自身を生き抜き、自他と巡り合い、その価値ならぬ価値、喜びを知り、また、その絶望をも知らねばならない。その上でなお、自身が生かされている自己の生そのものに息づいている慈愛に誰でも、何を介しても、気付きうるものでなくてはならない。その時にこそ自分を生き、取り組むべき物事に気づけるのであり、そのためにこそ何をなしうるかという学びの動機が芽生えるからである。大学で学ぶ意味や可能性の根拠とその実質は、原理的に、他者によって教えられるものではなく、自己が自ら与える思考のプロセスなしに見いだされることはないのである。

7. 就学意欲の喪失の時代的背景と関心相関教育

初めから辞めるつもりで学生は入学しない。中退・離籍問題の根は過程にあるのであり、就学意欲の低下は学生の絶望を示す予兆的現象と考えられる必要がある。

では就学意欲の低下はいつ起こるのだろうか。

学生が一体どの段階で就学意欲を失うかについては諸説ある。

入学前からそもそも意欲的ではない場合もある。「全入時代」において、受験勉強に取り組もうとするモチベーション喪失についてのことさらに説明は不要だろう。あるいはまた、自分から大学進学を望んだわけではなく親の指示に従ったケースや、本来進学しなかった大学ではない不本意入学を選択したケース等も考えられる。

このような時代にあっては確かに就学意欲を育くむ時間や方法が確保されねばならないだろう。その上で、初年次教育において大学での就学態勢を身に着けることは重要だ。それは大学という学びの場における、いわば学問的世界への冒険に旅立つためのあらゆる基礎とベースとして、学生の知的冒険の意欲育成の源泉を与えるからである。

大学における学び、その知的体験が、学生にとって世界を一新する新たな発見を与え、学生自身の生の感度を育み、個々の学生の固有の関心と世界とがしっかりとリンクするかどうか、その冒険の経験の本質として最も重要である。世界や社会と自己との結びつきに自覚的であるからこそ、事柄に対する就学意欲は持続し向上しうるからである。

総じて今日、学生は、得られるかどうかかわからない可能性に対しては警戒し、チャレンジを避け、より安全でより確実なものに向かって一より安全で確実である保証は実際にはどこにもないのだが一、必要以上の労力をかけずに、高望みをせずに、生存を維持することへの傾向性を強めているように見受けられる。

これはこの時代特有の気質ないし雰囲気として銘記されるべき現象ではなかろうか。

したがって、そのようにいわば「なかば遮断された世界」を生きる学生に対して、投げか

ける言葉が届くということは、すでに大きな困難を含んでいる。

しかし、そうであるからこそ、この問題の構造と本質、時代性を踏まえたうえで、学生の関心と意欲に向き合うための教育システム・教育プロジェクトが考えられる必要がある。これを学生の「関心相関教育」と呼んでみたい。

関心相関教育は、上に見てきた社会、大学、人間の主体的相関構造と、そして、大学における学生、職員、教員の三位一体の相関関係を基礎としながら、主体の人間自身の心身及びその認識を原理として相関する経験的本質を問い直し、創造的な知的体験を生み出し、教育的関心の相関性における質的効率化の原理を模索する視座と考えたらよい。とはいえ、このアイデアは、また改めて詳論する機会を待たねばならない。

8. 就学意欲をめぐる一般的状況とその対策例

就学意欲をめぐる一般的状況については、その例の枚挙にいとまがない。

たとえば、2010年2月26日付の読売新聞⁽¹⁾では「子どもの基礎学力の低迷」に対する懸念、危惧の一般論が示されている。そこで提示されている問題は主に以下である。

義務教育における教育の一律性、就学困難に対するフォロー体制の欠如や、学校によって異なる教育理念と教師の質、就学意欲を喚起する環境の欠如、個人間で生じる学びの優先順位の相違とその影響、また学校の組織的欠陥や家庭環境の問題が挙げられている。

また、就学意欲そのものの可能性の喪失に警笛を鳴らす事態として、例えば、2017年1月31日の毎日新聞では、被災地の子どもたちの大学進学に対する意識調査で、大学進学は「不可能」とする割合が65%超となったことが取り上げられている。⁽²⁾そこでは「家庭の経済状況と希望の隔たりは、子どものやる気の低下につながる」可能性が指摘され、とりわけ、自分の人生の展望が、両親や生活状況を見捨てて想像することは甚だ困難であることが示されているといえる。

高大連携に関する共通認識としては、就学意欲の低下と学生の傾向について、立命館大学教育開発・支援センターが発行する「CER News Letter (ユニタース第327号)」において、中等教育部副部長の桂博司はおおよそ次のように述べている。⁽³⁾

都道府県調査による就学意欲の実態調査では、部活加入率の低減、アルバイトに割かれる時間の増大、家庭学習の減少が共通問題として認識されている。また、復習するための学修内容の質も希薄化しており、進学に際しては名門校への進学よりも「自分探し」に傾いていると指摘している。

また、就学意欲の低下の原因として「体調不良」を指摘する声もある。東海大学教授の小沢治夫は、通学・学修意欲の欠如原因の第一位に「体調不良」があると指摘している。⁽⁴⁾彼によれば、就学意欲の低下の要因は心的要因というよりむしろ生活習慣の悪化が主たる原因であり、これが及ぼす影響として集中力の欠如が挙げられると説明している。

(1) 読売新聞, 2010年2月26日朝刊, p.33を参照。

(2) 読売新聞, 2017年1月31日朝刊, p.27を参照。

(3) 桂博司「学習意欲を引き出すために 第2回高校・大学教員の懇談会を終えて」(『CER News Letter 00-7, ユニタース第327号』, 立命館大学, 大学教育開発・支援センター)を参照。

(4) 読売新聞, 2009年4月10日朝刊, p.13を参照。

こうした状況に対する対策として、どの大学においても様々な取り組みがなされている。

例えば、2009年に実施された「大学教育改革フォーラム in 東海2009」⁽⁵⁾においては、東海地域の大学間および教職員の共同的「大学教育改革」のための自由な議論の場が設定されている。そこでの共通課題はまさしく「就学意欲の低下」問題であった。その報告書では、「主体的な学び」をいかに実現できるかという課題に帰着している。また、例えば大学生活そのものを豊かにするための課外活動については学生によるピアサポートの例と効果などについても言及されている。

また、企業においても、大学と社会の結びつきを見える化し、就学意欲向上の仕組みの開発に取り組んでいる動きもみられる。

HAW International Inc.では学修進捗システム「ediea」が開発され注目を集めている。この取り組みで学修状況の進捗を「見える化」するシステムの開発に成功し、また、地元だけでなく海外のシリコンバレー（IT産業密集都市）主要都市との協力関係を締結することで、大学を起点とした町ぐるみの経済活性化のための取り組みを開発している。⁽⁶⁾

また、教育改善の核心について、例えば東北大学教育支援センター長の羽田貴史は、「日本私立大学協会アルカディア学報No.502」の中で次のように述べている。

「教育改善への起点となりうるものがあるとしたら、それは学生が学ぶ意味を自分の人生や社会との関係の中で明確にし、知識を現実と結びつけ、構造化された認識・感性・行動の主体へ成長する意欲を持つことである」⁽⁷⁾。その実現のためには、特に初年次ゼミなど基礎教育を手厚くし、スタートラインに立つ学生の興味関心、基礎体力、基礎知力をフォローアップすることが不可欠であると述べている。

一方では、玉川大学で行われた全学規模の就学に関するアンケートにおいて、学修支援の対象が初年次教育のみでは不十分であるというデータが示されている。それによると、玉川大学では2008年に全学生、全教職員、保護者らを対象としたアンケートを実施し、学業の充実度が二年時に低減していることを明らかにした。米国でも同種のデータが存在することがわかり、これを受けて玉川大学では2003年には「一年次セミナー」を実施し、基礎的な学びをフォローした。しかし、意欲が下がる二年生に対するフォローが欠如している可能性があったと指摘している。⁽⁸⁾

このような問題群とその対策例から再認識されるのは、就学意欲の問題の根深さである。就学意欲の問題解決のためには、部分的対処のみでなく、人間の心身及び生の欲望との関心相関性において、社会及び大学の構造から考えられねばならないことを改めて示している。

(5) 日本私立大学協会発行、教育学術新聞、教育学術オンライン、第2352号、https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2352/7_1.htmlを参照。

(6) HAW Internatioal Inc. 公式HP、<http://www.haw.co.jp/philosophy/> 及び、当該開発システム「ediea」公式HP、<http://www.ediea.net/concept>を参照。

(7) 日本私立大学協会、アルカディア学報No.502、羽田貴史「大学教育はだれが担うのか 失望、危機—中教審答申を読んで」を参照。

(8) 読売新聞、2009年8月28日朝刊、p.34を参照。

9. 就学意欲の前提としての生の欲望

学ぶ意欲は、そもそも、一人一人の人間の生の現場、生の現実性の認識において、よりよく生きたいという生の欲望に相関している。その学生の心、その学生の身体、あるいは性。生きること必然的に作用を与える個々固有の存在と切り離して、「よりよく生きるために学ぶ」就学意欲というものをあたかも「どこかにある」ものとして想定することはできないはずだ。

生きたい、よりよく生きたい、という生の欲望にとって、知的関心や就学意欲はより上位の欲望として位置づけられる。

アリストテレスは、人間は生まれつき知ることを欲すると述べたが、それは誰でもいつでもすぐにではなく、日々の生活に溺れて多忙である限り、智を愛するテオリアの境地には至らないと喝破している。

つまり、就学意欲の前に、まず生活そのものに向き合う労苦がある。これは端的に言えば、安定化することは極めて難しいものである。そうであるからこそ、大学に通学する通路をもつことに、ほかにはない自由で有意義な学びの経験があるとも言えるのである。

そしてそこで自分や家族ではない、社会の一員としての他者に向き合うことによって、自分自身の生の延長上に他者の生があることを学ぶ中で、自己のみならず他者からも、自分の存在が受け止められ、肯定されあるいは時に否定されることを通じて、相互に認められうる必要があるのである。誰かに認められる自分の生に向かって挑戦できるということがなければ、生きること、学ぶこととは、なんとむなしく、さみしく、退屈なことだろう。

なぜ、今の時代の子どもたちは、自分という存在に向かって、その可能性や望みを求めることから身を退かせるようになってしまったのだろうか。

もしかするとわれわれは、子どもを愛しているからといって、彼らや彼女たちが傷つかないこと、まちがえないこと、悲しまないことを、あまりにも求めすぎているということはないだろうか。そのことでかえって、過度なルールや期待を押し付け、子どもたちの世界そのものを冒してしまっているということはないのだろうか。

しなくてよい苦労や、痛み、悲しみは、確かにこの世界にたくさん存在する。それでも、われわれはそれらに向き合い、向き合うからこそ、なお生を愛しうるのではないだろうか。

悲しみや苦しみは、いつの時代にもなくなることがない。だからこそ、生を愛し抜いてゆく道筋が示されねばならないのではないのか。それをこそ、その生の可能性をこそ、われわれは学問という智と芸術 (Arts) のうちに探し求めてきたのではなかったか。それゆえに、人は知を求め愛するのではないのか。

生を愛するその可能性を、その道筋と現実を自他に示し、子どもたちに示して、自他が互いに尊敬し合い、胸を張って生きる喜びを享受することができること。その素晴らしい生の喜びを実現するために、互いを自由にするために、学ぶ意味とその価値はあることを、大学は子どもたちに伝えなくてはならないのではなかろうか。

たとえどんなに、いま、ここで、生きる意欲や学ぶ意欲が失われようとしているとしても、その意味を了解し、そこから自分自身を通じてできることがあることが示されうるものでなければ、学びというものにいったい何の価値があるといえるのだろうか。

人間の心に、生を望み、生を愛し、よりよき生の可能性を求める道筋が開けること、それ

がたとえどんなに否定的な認識をもたらすとしても、なお、知ることから一縷の可能性が見出されうる。その道が閉ざされてはならないのである。

おわりに

就学意欲の問題は、社会と大学と学生の三者における構造的な問題であり、また、大学における三位一体関係の問題である。そしてその根底にはすべての要となる個々の生の欲望がある。就学意欲は学生の心身と教育社会構造との相関性において考えられねばならない。その根本にあるのは、大学の本質であり、人間の本質である。学ぶ場や学びの意味は、生きようとする主体の本質的可能性を照らし、これに実現の道とその力を付与するからこそ、生まれうるのである。

この準備的研究においては、大学教育と就学意欲の前に、大学のアイデンティティとその存在意義を支える構造を理解し、学修主体が就学する意味を発見する道筋の論理を明確にしようとした。また、その相関的論理構造において主体としての学生が、就学する意味をつかみ直すプロセスを大学生活そのものの過程ないし思考過程における知的体験のうちに見出しうるものと考察された。

総じて、就学意欲を生み出すためには、まず、学生本人の生の欲望とその視座が本人自身によって明確にされなくてはならない。そして、大学という学びの場は、学生に、三位一体となって学びの可能性を実現するプロセスを与えるのでなければならない。

その際には、大学の使命であり本質である建学精神と教育理念が今一度各構成員によって確かめなおされ、吟味され、自分たちの紐帯として有機的に互いを結び付ける学びの根拠であることが自覚されなくてはならないのである。

その上で、三者の紐帯が活性される関係性の在り方を構築しながら、新たな希望とその実現をめざして新たな取り組みをたゆみなく創造し続けることが肝要なのである。

参考資料

- 谷川裕稔ほか「小規模大学における学修支援」, 2014年度, 第20回FDフォーラム報告書
下田好行『学習意欲向上のための総合的戦略に関する研究—「活用型・探求型の教育」の教材開発を通して—』, 平成19年3月, 平成18年度 科学研究費補助金基盤研究(C), 研究成果最終報告書, 課題番号 17530679)
読売新聞, 2016年9月30日朝刊, p.35, 「学習支援が今後の課題」関連記事
読売新聞, 2014年9月27日朝刊, p.11, 「AO入試『合格』優先」関連記事
読売新聞, 2010年1月5日朝刊, p.34, 「学力考」関連記事

(2017.8.21 受稿, 2017.9.5 受理)

〔抄 録〕

就学意欲の問題の根は、社会、大学、学生のあいだに横たわる構造的問題である。その改善の方途は大学構成員の三位一体の関係においてこそ求められる。

就学意欲の前に主体としての学生の生きる意志、生の欲望が存するのであって、その逆ではない。就学意欲は生の欲望の延長線上にあるのであって、それだけが単独的に発展したり減退したりするものではありえない。就学意欲の問題を考える際には、主体である学生自身の生の欲望に着目し、学生が自覚的に自分の生の欲望を考察することを通じて、自身固有の生の価値やその可能性に対する展望を自明化するプロセスが不可欠なのである。

大学は、建学の精神とその教育理念を紐帯とした、学生、職員、教員の三位一体の関係によってのみ初めてその教育価値を社会において実現しうるのであり、学生はそのような場においてこそ、学びの知的体験を通じて、自らの生を自覚的に探究する内的動機と学びの意義を見出しうるのである。その上で、三者の紐帯が活性される関係性の在り方を模索しながら、学問上の新たな希望とその実現をめざしたチャレンジを止めることなく創造し続けることが、学生と大学の未来にとって肝要なのである。